

Tomorrow is  
Another day

— 風 が 吹 く —



春号      Spring 2020   First issue

# 風は吹かせるもの

(社)日本庭園協会名誉会長 龍居 竹之介

「進取の気象に富む」という言葉があります。手元の字引には「自ら進んで事をなす」と説明されております。私はいつもこの言葉は、宮城県支部を引っ張ってこられた菊地正樹現日本庭園協会副会長のためにあるものと心得てきました。菊地さんがかつて手掛けられた庭園団体の「現代庭園研究会」は庭の仕事を職とする人たちだけでなく、あらゆる職種の人たちで構成する団体であり、現在の宮城県支部の母体です。

当時から菊地さんの視野にあった庭とは、商売としてつくった綺麗な景色の陳列だけでなく、常に一般社会との協調性もあり、同時に豊かな文化性、芸術性などを大切にする気配りまで組み込まれていたのです。

実はこの姿勢は日本庭園協会誕生の時、創立者の一人、上原敬二先生が考えられていたのと同じようなのです。この会報名「風が吹く」はおおらかさが感じられて素晴らしいですが、菊地さんが長く抱かれてきた「風は吹かせるもの」とでもいうべき積極的かつ能動的姿勢も宮城県支部は大切に持ち続けてほしいと思っています。

## “Make the wind blow”

Takenosuke Tatsui

There is the word “rich in enterprising character”. It means Let's do things on your own in the dictionary.

It is explained. I always say this word Masaki Kikuchi, who has been pulling the Miyagi branch

I have understood that this saying is for Mr. Kikuchi, the Vice Chairman of the Japanese Garden Association.

He has led the “Contemporary Garden Study Group”, garden organization. This Group is not limited to those who work in the garden but for any kind of works.

It is an organization made up of people of different group, and is the parent body of the current Miyagi branch.

The garden that Mr. Kikuchi had in his eyes from that time was not only the display of beautiful scenery created as a business.

In addition, there is always cooperation with the general public, and at the same time there is a desire to value rich in cultural and artistic features.

Actually, this attitude was considered by one of the founders, Professor Keiji Uehara, when the Japan Garden Association was born.

This newsletter's name “Tomorrow is Another day” makes me feel laid back, However, Mr. Kikuchi's long-held proactive and active approach, which can be said to be “make the wind Blow”.

I also hope that the Miyagi Chapter will continue to maintain this positive attitude.





本堂西側の廻遊式日本庭園

# 満興寺の庭



書院前の蹲踞は茶道の稽古に使われる

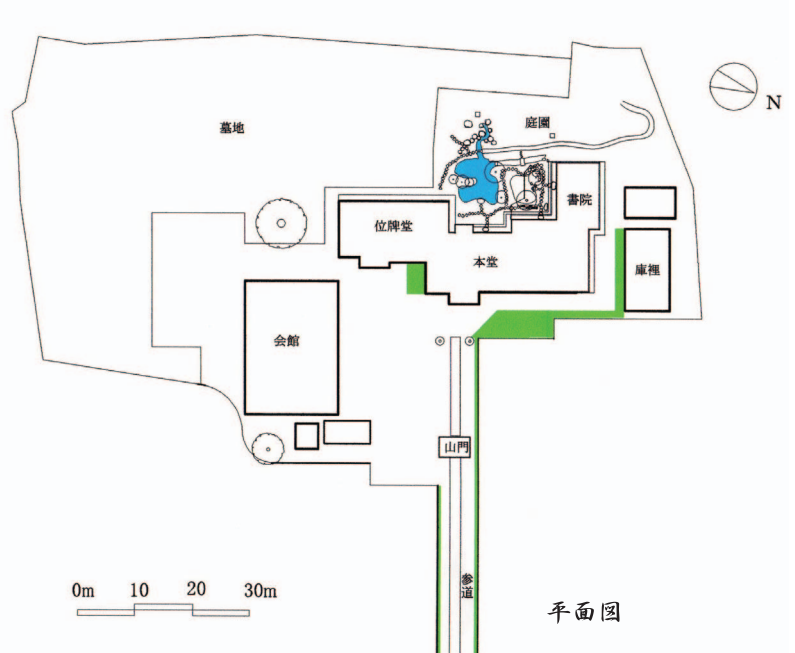




滝の景観は書院からも見えるように構成されている



延段石を進むと茶庭がある



太桂山満興寺 宮城県仙台市泉区根白石町西上27





泉作庭  
仙台市泉区福岡字西泉 24  
TEL 022-379-2306  
e-mail: isaksendai@gmail.com

## 親子でつうった寺の庭

仙台市北西部の根白石(ねのしろいし)地区に古刹「太桂山満興寺」がある。根白石には伊達政宗の祖母栽松院のお墓があり、政宗公は墓参りや、狩りの際にこの寺を宿にしたと言われている。この寺には本堂と書院が隣接する西側に、杉林を背景に斜面を利用した池泉式の庭園(約500㎡)がある。

作庭したのは根白石に店を構える泉作庭の熊谷常司(つねじ)親方と、弟子であり息子である裕典(ひろのり)氏。熊谷家が代々の菩提寺であった縁で先代から庭の手入れなど管理を任されており、庫裡を新築するときに庭園の改修工事を依頼された。その後、書院の増築の際も茶庭の築庭がおこなわれ10年にわたり工事が続いたという。平成12年に庭が完成してから庭守を任せ、境内全般の維持管理をおこなっている。

当時、寺院の裏庭は杉林と竹林が雑然と生い茂っていた。庭園の全体計画を作成する際、住職から「水脈が各所にあるのでそれを利用し、高低差のある地形をそのまま活かした庭をつくってほしい。」と要望があった。熊谷親方は庭の構想を練る際、干ばつになっても湧き水が涸れないという寺の七不思議の言い伝えを聞き、湧き水が流れる水景をイメージした。背景の杉林と庭との高低差を利用した滝をつくり、建物近くの池に注ぐという池泉回遊式庭園を提案する。護岸石組や滝石組は鳥海石で統一。庭の園路は鳴子石を敷き並べた大胆な畳石で構成され、庭園全体が建築にまけない重厚さがある。書院前の庭にはアラカシの古木を生かした茶庭があり、その奥に離れ落ちの滝が楽しめるよう水景を工夫してある。

常に手入れの行き届いた満興寺の庭園は、仙台市内では自然の湧水を活かした数少ない池泉回遊式庭園として、四季折々の季節の変化を醸し出し、檀信徒や庭の愛好家に親しまれている。

## 泉作庭

1988年に熊谷常司氏が泉作庭を設立。民間の住宅の庭を数多く手がけ、宮城県卓越技能章・仙台市技能功労章を受賞。2013年より裕典氏が後を継ぎ代表となる。建築の仕事からスタートした裕典氏は、宮大工の仕事に触れ、匠の職人がつくる仕事の魅力を再認識。後に父親の仕事の見方が変わり建設会社を退社、弟子として庭師の仕事に就く。近年は県内各地で様々な形態の庭づくりをおこなっている。一級造園技能士・一級エクステリアプランナー・二級建築士の資格を持つ。趣味として嗜むお茶は武者小路千家準教授の資格を持つ。2014年から2018年まで日本庭園協会宮城県支部の事務局長を務め、総務全般を統括、東日本大震災復興記念庭園の整備事業を完成させる。



## 夢創り Dream creation

2014年10月11日。秋の気配を感じる覚照寺境内で第2回伝統庭園技藝が開講された。会場では金子直作会長と菊地正樹支部長が全国から集まった参加者を笑顔で迎え入れた。顔ぶれは初回の技藝に参加した若者が多く、1年ぶりの再会に喜ぶ姿が見られた。

今回は貯水池の堤体内側のロックフィル石張工（100 m<sup>2</sup>）、滝口までの水路工（5 m）、メインである滝石組（40 t）、湿地帯東斜面の土留石組（50 t）、地被類の植栽、苔貼り等の整備である。実技研修は施工内容ごとに5班に分かれ、担当指導員の下でカリキュラムが組まれていた。初年度より、東日本大震災復興記念庭園の整備は自然地形の特性を踏まえ、徐々に上流から下流に向け整備をおこない仕上げていくという計画を立てていた。今回の庭園技藝はその整備の手始めとして特に重要な部分であり、構造上、高度な施工技術が求められるエリアである。

研修会は差し迫る台風情報を注視しながら大急ぎの実技研修となり、3日目の夕方までおおまかな形が出来あがった。その夜、予報通り台風が直撃、記録的な雨量となって近隣各地に大きな被害をもたらした。山すその谷間に築庭される庭園に免れることができない大自然の試練がやってきたのである。想定外の豪雨は枯葉や流木が滝の流れを堰き止め、堤を越流して法面がえぐり取られた。

翌朝、空も晴れ渡り、現場では塾生と関係者全員で復旧作業にあたった。さらに貯水池の堤体下部の脇から水が噴き出ている箇所があり、急遽、堤体のコア部分を深さ3mまで掘り下げ調査したところ、江戸後期に設置されたと思われる木管が見つかった。漏水の原因は満水になった貯水池の水圧が加わり、それを通して水が噴き出したことであった。ただちに原因となった木管を取り除き、粘土とセメントの混合土で埋め戻し、しっかり締め固め修復することができた。これにより、大雨で発覚した貯水池の漏水箇所の補修ができ、より安定した堤を築くことができた。何はともあれ、台風直撃されても前日完成した滝石組が無傷だったことが不幸中の幸いであった。又、思いがけなく貯水池から流れ出る豪快な滝の様子を詳細に観察することができたのが何よりの収穫となった。

後にこの光景を体験したある塾生は、「あの時、流れ落ちる滝の様子を見ていると感激で震えが止まらなかった。」と語っていた。泥まみれになりながら必死に研修に励む塾生の姿を見ていた雨神様が試練を与え、そして、ご褒美をくれたのでしょうか。ありがたい台風の襲来であった。このように、第2回の庭園技藝は自然災害を目の当たりにするなど、通常は体験できない、思い出に残る庭園技藝となった。



恒例の準備運動で実技研修が始まる



宮城県赤十字奉仕団がサポートする



水路の河床を十分に転圧する



メインの滝石組は鳥海石で組む



流れ落ちる滝の様子に感激する塾生



越水で削られた法面を修復する



堰堤内側の法面を締め固める



ロックフィル用石材を丁寧に敷き並べる



堰堤法面を苔とシダで修景する



完成した滝石組と土留石の景観



## 編集長のつぶやき

庭の「良し悪し」は何をもって判別されるのでしょうか。日本庭園にこだわり続け、50年近くなりますが、未だにその基準となる定義がはっきりしていません。色々と論じていても一向に結論を出せないでいるのが、現状のようだ。たとえば、絵画の世界に置き換えて考えてみるとわかり易いのではなかろうか。日本画と言えば水墨画が古い歴史を持つ。私は安土桃山時代の絵師「長谷川等伯」の松林図屏風が特に気に入っている。乱世の時代に描いたあの絵はまさに画伯の人生を描いているように思える。

ご承知のように、水墨画は墨一色で表現される絵画です。その世界は、日本人の心に深く根付く「わび、さびなどの渋さ・質素を好む文化」「茶道、華道にみられる人をもてなし、心を落ち着かせることを愛する文化」に通じていると言われています。

庭づくりも水墨画を描くように「簡素で繊細な表現」など、さまざまな技（わざ）を用い、心の奥に深く残る文化を創出することではなかったのか。私たちは長い歴史のある伝統的な古い文化からそのすべを学び、庭園の美を追求し続け、それを生かす事ではないのか。私はこれが「庭づくりの定義」ととらえている。これこそ、私たちがつくる日本の庭の「良し悪し」が決定される大切な要素であると思う。

(横山英悦)

## Editor's Note

What is the difference between "good" and "bad" for the garden? I've been living with Japanese gardens for almost 50 years, but the concrete definition is still unclear. It seems that the current situation is that even after various and lengthy discussions, it is difficult to reach a conclusion. For example, it might be easier to understand if you think about it by replacing it with the world of painting. Speaking of Japanese painting, ink brush painting has a long history. I especially like the pine forest folding screen by Tohaku Hasegawa, the painter of the Azuchi-Momoyama period. The picture he drew during the turbulent period seems to describe the artist's life. It seems as if he is expressing his life simply.

The world is deeply rooted in the hearts of Japanese people, It is said that "a culture that likes the astringency and simplicity of abalone and rust" and "a culture that loves the calming of the tea ceremony and flower arrangements, and the calming love".

In this way, the gardening should have been to create a culture that remains deep in the heart by using various techniques (purposes) such as "simple and delicate expression" like drawing an ink painting. Isn't it possible for us to learn everything from traditional and ancient cultures that have a long history, continue searching for the beauty of the garden and take a good advantage of it? I take this as the "definition of gardening". I think this is an important factor in determining the "goodness" of the Japanese garden we produce.

(Eietsu Yokoyama)

発行 日本庭園協会宮城県支部長 菊地正樹

題字 小泉 遼

写真 ササキシゲル

翻訳 小林 竝一

印刷 仙台ドラフティングサービス㈱

表紙 東日本大震災復興記念庭園（覚照寺）

Issued by The Garden Society of Japan, Miyagi-branch  
President Masaki Kikuchi

Title by Ryo Koizumi

Photographs by Shigeru Sasaki

Translation by Koichi Kobayashi

Printed by Sendai Draftingservice Corp.

The Great East Japan Earthquake revival memorial Garden